28.9.13 読　売

自転車マナー訴え20年

葛飾の協議会長 95歳矢﨑さん

「地元に恩返し、貢献続ける」

9/13

葛飾区で自転車のマナー向上を呼びかける民間団体「東京葛飾バイコロジー推進協議会」の活動が今年、20年目に入った。発足当時から中心となって活動を続けてきた会長の矢﨑文彦さん(95)は、長年自転車業界に身を置いた経験から、「自転車人生の恩返しとして、地域に貢献し続けたい」としている。

矢﨑さんは大学卒業後の1942年、都内の自転車メーカーに就職し、工場があった同区青戸の寮で生活した。戦時中、工場は海軍の機関銃の部品を製造し、矢﨑さんも44年8月に徴兵され中国戦線に赴いたが、戦後に復職。同区柴又に住まいを移し、全国の販売店を巡って自転車を売り歩いた。

荒川や江戸川に囲まれた同区は、土地がなだらかで、自転車で走るのにぴったりといい、矢﨑さんはすっかり気に入った。戦後間もない頃、江戸川河川敷で映画の撮影があり、女優の原節子さんらに小道具として自転車を貸し出すと、映画公開と同時に「あの自転車がほしい」と飛ぶように売れたという。

「自転車は最高の乗り物です」と話す矢﨑さん（葛飾区立石で）

矢﨑さんはバイクメーカーや自転車部品会社を渡り歩き、退職後は自転車の業界団体の専務理事を務めた。退任後、「自転車を通じて地元に貢献したい」と、地域住民や自転車業界の関係者に呼びかけ、97年に協議会を発足。事務局長に就任し、2006年に会長となった。

協議会は毎月1回、駅前で放置自転車の撲滅を呼びかけるビラを配り、春と秋には区内の小学校で交通安全講習を開いている。毎年秋には、全国交通安全運動に合わせ、自転車で区内をパレードし、区民に交通ルールの順守を訴えてきた。

矢﨑さんは「銀輪一筋の幸せな人生を送れたのは葛飾のおかげ。これからも自転車事故ゼロを目指して取り組みたい」と話す。体力をつけて会長職を全うするため、毎日、自転車に乗り続けているという。

今月24日には、協議会メンバー約30人とともに、自転車で同区の葛飾柴又寅さん記念館から都立水元公園までの約5キロの道のりをパレードする予定だ。